The Roman of Kitakata

喜多方市には、由緒ある寺院が少なくない。四方を山に囲まれた、閑静なまちに暮らす信仰篤い人々は、そこにまつられる仏像たちに、深い祈りを捧げ、守り続けてきた。これらの仏像や建造物には、文化財としても優れたものが多く、喜多方の長い繁栄の歴史が偲ばれる。

なかでも、願成寺の「木造阿弥陀如来及両脇侍坐像」は、寄木造りで、鎌倉時代の作とされ、国の重要文化財の指定を受けている。会津大仏とも称されるように、二四一㌢の堂々とした大きな仏像である。観音菩薩と勢至菩薩を脇侍につけ、千体仏を散りばめた船形光背を背に、ゆったりと座している。三像とも金箔が貼られ、金色の輝きは観る者を圧倒する。二重蓮台の上に結跏趺座といわれるあぐらをかいたポーズで座す来迎仏は、東北では珍しく、京都大原三千院の来迎三尊像に習ったものといわれる。

同じく国の重要文化財である中善寺「木造薬師如来坐像」は、藤原時代の様式を継承した、寄木造り、漆箔押の八八㌢の坐像で、鎌倉時代の作とされる。丸く優雅な面差しや、ゆるく流れる翻波式の衣紋など、整った姿が気品を感じさせる。中善寺は、真言宗関堂山と称し、若松の弥勒寺の末寺で、延慶三年（一三一〇）忍阿上人が開山したと伝えられる。

もうひとつの国の重要文化財「勝福寺観音堂」は、豊京都から松島へ行く途中、この地で亡くなった「勝の前」の冥福を祈って建てられたといわれる和様・唐様の折衷建築で、室町時代中期の建造物として貴重なものである。

また、重要美術品として国から認定される太用寺の「木造釈迦如来立像」は、千三百年の前期に作られた、清涼寺釈迦像で、檜寄木造り、高さ一六四・二㌢の等身像。京都嵯峨の清涼寺本尊と同じ材料・作法といわれる。同心円風の衣文とうず巻き状の髪形、右耳のみに玉をつけた珍しい様式をしている。これは奈良・東大寺を中心とする禅宗の流れが、古くから喜多方まで及んでいたことを示している。

県指定の重要文化財としては、勝福寺の「木造不動明王立像」や「木造毘沙門天立像」があげられる。二体一対で観音菩薩を守る脇侍で、弘安二年の墨書銘がある。福聚寺の「銅造観音菩薩立像」は、高さ二三二㌢余りの金銅仏で、奈良時代前期の白鳳時代のものといわれている。長い歳月を経たこれら喜多方の文化財は、いにしえの人々の信仰と篤い祈りを今に伝える。